小説第一勧業銀行

大合併

高杉 良

講談社

大合併

小説第一勧業銀行

高杉 良

講談社

大合併

定　価　一二〇〇円（本体一一六五円）
発　行　一九八九年十月　五　日　第一刷発行

著　者　高杉　良
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二―〇一
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂

Printed in Japan　©高杉良　1989

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部宛、お願いいたします。

ISBN4-06-204536-2　（文二）

大合併　目次

第一章　深夜の攻防　5
第二章　ザ・ロンゲスト・デー　52
第三章　幻の「三菱第一銀行」　88
第四章　頭取復帰　125
第五章　二人の仲介者　137
第六章　秘密協定　164
第七章　最後の三者会談　194
第八章　ＣＩ戦略　224
第九章　店舗開発の苦闘　259
第十章　世界一の栄光　296

装画／板垣しゅん

装丁／熊谷博人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大合併

小説第一勧業銀行

第一章　深夜の攻防

1

掛け時計の針は午前零時を指している。

井上は、時計を見上げながら受話器を左手に持ち替えた。

寝入り端を襲われたのは午後十一時五十分を過ぎた頃だから、電話は十、十一の両日にまたがったことになる。

昭和四十六年三月十日の深夜、西品川の高台にある第一銀行頭取の井上薫邸に電話をかけてきたのは、日本経済新聞社編集局経済部次長の池内正人であった。

さっきからずっと押し問答がつづいている。

井上はねばりにねばった。

「とにかく困ります。いま、新聞に書かれたら、合併がこわれる可能性がないとは言い切れません。

もうちょっと待ってください。必要最小限の根回しはしておかなければ……」
「根回しは充分すんでるじゃありませんか。われわれはその裏も取ってます。百パーセントまとまる確信がなければ書きませんよ。これ以上は待てません。根回しがすすめばすすむほど、他社に嗅ぎつけられるリスクが増加します。いや、すでに嗅ぎつけられていると考えるべきでしょう。某紙が十一日の夕刊で書く可能性が濃厚です。だいたい二十三日に発表するなどといい加減なことを言ったのはどなたですか。失礼ながら井上さんにも横田さんにも不信感を覚えます……」
井上は、眉宇をひそめた。それを言われると耳が痛い。
日経にスクープされるのは、ゆきがかり上仕方がないとしても、池内に発表日を明かさず二十三日頃とぼかしたのは、できるだけ引きつけておいて時間をかせぎ、大口株主などの取引先や行内の根回しを周到に行ないたいと考えたからだ。
〝三月十八日発表〟を日経に伝えればスクープされるタイミングが早まり、それによってどんな妨害が入らないとも限らない。万々一ということもある。
夢にまで見た日本勧業銀行との合併がご破算になったら、死んでも死に切れない。
横田とは、日本勧業銀行頭取の横田郁のことだが、二人共通の知己である澁澤倉庫社長の八十島親義の力を借り、一年半もかけて三人で積み上げてきた合併話が、大詰めを迎えて九仞の功を一簣に虧くようなことだけは絶対に避けなければならない。
両行の合併問題を長期間スクープせずに協力してもらった、という認識は井上にも横田にもあったから、日経には、十七日に〝実はあす十八日に発表する……〟と伝えることで両頭取間の合意はできていた。
十七日までの一週間に、要路への事前説明は完了する――。そのスケジュールを着々と消化して来

たのだが、それをぶちこわされるのは、なんとしてもつらかった。
三月十八日は大安吉日だが、〝十八日発表〟をキャッチした日経取材陣はさすがと言うしかない。それを知っているのは、井上、横田、八十島の三人と大蔵省事務次官の澄田智だけだ。
澄田には、横田から耳打ちしてある。
澄田が、第一・勧銀の合併話を銀行局長の近藤道生だけには話していると聞いていたので、日経のソースは澄田か近藤しか考えられない。
それにしても、池内のしつこさには呆れながらも、熱意には脱帽せざるを得なかった。
井上は、日曜日の午後、自宅の近くを散歩中に池内に出くわしたことがあった。
「わたしのところですか」
「いいえ。このへんをちょっとひと回りしにきただけです。他社の記者が来てるんじゃないかと気になったものですから」
「ふーん。それだけで、日曜日にわざわざ……」
井上は、内心うなった。
ずいぶん大勢の記者を知っているが、池内ほど凄いのにお目にかかったことはなかった。
今年に入ってから池内の夜回りは連夜続いている。十時頃にやってきて、玄関先で井上の顔を見ると安心して帰って行く。
「変ったことありませんか」
「別にないですよ」
顔を出さずに、家の周囲をハイヤーで一周して、他社の車がないことを確認だけして帰ることもあった。

第一と勧銀の合併は、世界でも例のない大銀行の対等合併である。日経がそのスクープに並々ならぬ情熱とエネルギーを注ぐのは、至極当然とも言えた。

「せっかくいままで協力してくれたんじゃないですか。せめてもう二、三日待ってくださいよ。お願いします」

「……」

「鶴田経済部長に替ってください。鶴田さんは、横田さんと私から合意が得られない限り書かないと約束してくれてるんです」

池内の返事が一瞬遅れたのは、多少心に咎めるものがあったからだ。

「鶴田は席を外しています」

居留守を使うことは初めから決めていた。

鶴田を電話口に出してしまうと、井上に押し切られないとも限らない。

「紳士協定を破ったのは、井上さんと横田さんのほうです。〝二十三日発表〟をそのまま鵜呑みにしていたら、必ず他紙に抜かれたと思います。〝二十三日に発表するから、そのつもりでいてくれ〟と井上さんも横田さんもおっしゃいましたね。僕はあやうくお二人に騙されるところでしたよ」

「騙すなんてそんな……。日経さんにスクープされることについては、横田さんも私も異存はないんです。ただ、十一日付で書かれるのは、いかにもまずい。タイミングが悪すぎます」

「申し訳ありませんが、これから横田さんにも電話をかけなければならないので、これで電話切らしていただきます。夜分失礼しました」

「もしもし……」

井上はあわてて呼びかけたが、受話器からツーンという乾いた音がするだけで、電話は切れてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。

ドアに近いほうのベッドに腰をおろして、心配そうにこっちを見ている妻の光子が、電話の最中に肩にかけてくれたガウンの袖に手を通しながら、井上が言った。

「ちょっと長くなりそうだ。先に寝(やす)んでくれ」

「そんなわけにはいきません。わたくし下へ行っております」

井上は、光子の後から階段を降りて行った。

子供の成長と共に継ぎ足し継ぎ足しして増築を奥へ伸ばした関係で、鰻の寝床のように細長い家だ。

門構えといい、狭い玄関といい、玄関から右手にすぐの応接間のたたずまいといい、大銀行の頭取邸に相応(ふさわ)しからぬ陋屋(ろうおく)である。

電話は切り換えになっていて、一階の廊下と二階の寝室にあるが、しんしんと底冷えする寒い夜だったので、小型の電話帳を持って井上は寝室へ戻った。

なにはさておいても横田と連絡を取らなければならない。井上がベッドに腰かけてダイヤルを回すと、案の定、話し中だった。池内に先を越されたらしい。

井上が十分ほど待たされている間、横田と池内のやりとりがつづいていた。

横田は一階奥の書斎で、池内の電話を受けた。

約三百坪の土地と百五十坪ほどの建坪を擁する西麻布の頭取公邸を私邸にしているが、ゲストハウスとして利用されることも多い。

横田は、井上ほどねばらなかった。

「十一日付の朝刊でやらせてもらいます」

「話が違うなあ。井上さんと僕の納得ずくで記事にすることになってなかったか」
「読売だけじゃありません。ＮＨＫも危ないし、もう待てませんよ。ご存じかどうか、印刷関係から洩れる心配もあるんです。大見出しに使う地紋入りの凸版カットをつくるのに時間がかかるんで前もって印刷関係に回さなければならないのです。こうして横田さんと話している間にもどこかに洩れてるかもしれません。だいたい五日もサバを読むなんて、ひどいじゃないですか」
横田は憮然とした顔でかろうじて言い返した。
「十八日と二十三日と両論あったんだ。サバを読んだわけじゃないよ」
「大蔵省には十八日に発表すると明言してるようですから、妙な陽動作戦としか取れません。とにかく、もう輪転機は回ってますから……」
「止められないのか。輪転機に砂をかけたらどうだ」
「無茶言わないでください」
「それじゃあ否も応もないじゃねえか」
横田は、池内に押し切られた恰好だった。もっとも、三十分ほどあとで、大蔵省事務次官の澄田智に嚙みついている。

横田が受話器を置いた途端に電話が鳴った。
もちろん相手は井上である。
挨拶もそこそこに横田が切り出した。
「池内君は、輪転機が回ってると言ってたが、そうなると明朝の日経新聞にスクープされることを前提に考えんといけませんかねえ」

「わたしには輪転機が回ってるとまでは言ってませんでしたよ。せめて一日か二日待ってもらえるといいんですが……」
「十八日の発表日を日経にリークしたのは澄田さんでしょう。まったくけしからん」
「わたしも池内君に不信感を覚えるなんて言われてまいりました。澄田次官は、福田蔵相に話してるんでしょうねえ。日銀のほうは大丈夫です。佐々木総裁に挨拶しておきましたから……」
井上が、日本銀行に佐々木直総裁を訪問したのは十日の午前である。
総裁応接室で、井上は感慨を込めて佐々木に深々と頭を下げた。
「実は、第一銀行と日本勧業銀行が合併することになりましたので、ご報告に参上しました」
「ほーう。それは朗報ですねえ。井上さんと横田君なら、仲良くやれるでしょう」
「八十島君を仲人役として、一年半ほど前から三人でじっくり話を詰めてきたんです」
「なるほど。三人の組み合せなら、まとまるはずですよ。井上さんは三菱銀行との合併には猛烈に反対されたが、勧銀なら、対等合併だし、財閥系ではないから文句はないわけですねえ」
「これ以上の相手はないと思います。あのときあなたには、ずいぶん叱られましたが、これで少しは挽回できましたかね」
「いや、百点満点です。あれから、わずか二年で、よくぞ……」
滅多にひとを褒めない佐々木に称揚されて、井上は胸が熱くなるほど嬉しかった。
二年前、昭和四十四年一月――。井上が永い生涯の中で、最もエネルギーを燃焼させたときである。
当時、井上は第一銀行の代表権を持たない会長にタナ上げされていたが、長谷川重三郎頭取が三菱銀行の田実渉頭取と推進しようとした三菱・第一両行の合併に反対し切って、白紙還元に持ち込んだ

のである。

四十四年元旦の読売新聞のスクープを契機に、水面下で続けられていた第一銀行サイドの反対運動が吹き出した。

反対運動の一環として、第一銀行の元頭取で相談役の酒井杏之助が個人名で、大蔵省、日銀、株主、取引先などの関係各方面に文書でアピールしたが、当時、日銀副総裁だった佐々木は、これを行き過ぎとみて、井上に直截に不快感を電話で表明して来た。

「おたくの酒井さんから妙な手紙をもらったが、こんな莫迦なことをさせていいんですか。こんなお家騒動を続けていたら、名門の第一銀行は対外的な信用をなくすだけですよ。取り付け騒ぎにならないとも限らない」

井上が、佐々木に対して「あのとき叱られた」と言ったのは、この間の事情を指している。二年前の合併反対運動を思い出すにつけ、井上が感慨無量になるのも無理からぬことと言えた。

金融再編成の必要性については、三菱・第一両行の合併が失敗したあとも強く叫ばれ続けてきた。大蔵大臣の諮問機関である金融制度調査会は昭和四十五年六月十九日付で「一般民間金融機関のあり方」に関し答申、この中で金融機関の合併について以下のように指摘している。

金融機関が規模の利益を追求する方法の一つとしての合併については、そのメリットとして経費率の低下、資金繰りの安定等の規模の利益が期待されるほか、国民的経済的見地からは、店舗、電子計算機等の重複投資の回避、さらに経済の国際化を迎えて大型化しつつある企業の資金需要への対応等があげられる。また営業地域を同じくする金融機関の合併においては、近接店舗の整理統合と配置転換による店舗網の整備等のメリットも大きいものと思われる。

このように国民経済的観点からみて規模の利益を生かすような合併は推進されることが望ましいと考える。なお、その具体的な実行は、金融機関の自主的判断に基づくものであろう。

第一と勧銀の合併は、この答申に副うものであり、金融再編ムードの高まりの中での大型合併だけに、井上から話を聞いた佐々木が「百点満点」と褒めちぎるのも当然だった。

しかも都銀六位の第一と八位の勧銀の合併によって、首位の富士を遥かに凌駕する大銀行が出現するのだ。

ちなみに昭和四十六年二月末現在の都市銀行ランキングは次のとおりであった。

▽一位＝富士（預金量二兆六千八百六十一億円、貸出し二兆四千四百六十五億円）
▽二位＝住友（二兆六千三百六十六億円、二兆三千六百二十億円）
▽三位＝三菱（二兆六千三十八億円、二兆三千七百七十億円）
▽四位＝三和（二兆四千六百五十五億円、二兆三千五百七十八億円）
▽五位＝東海（一兆八千四百十四億円、一兆七千四百五億円）
▽六位＝第一（一兆七千五百七十六億円、一兆六千六百六十一億円）
▽七位＝三井（一兆七千五百四十五億円、一兆六千四百四十六億円）
▽八位＝勧銀（一兆五千七百八十六億円、一兆四千四百五十八億円）
▽九位＝協和（一兆三千四百三億円、一兆一千二百六十五億円）
▽十位＝大和（一兆九百七十二億円、一兆四百三十三億円）
▽十一位＝神戸（一兆四十八億円、八千九百四十三億円）
▽十二位＝埼玉（九千六百二十二億円、八千三百七十億円）

▽十三位＝東京（九千五十九億円、九千六百六十四億円）
▽十四位＝太陽（八千四百五十五億円、七千三百四億円）
▽十五位＝拓銀（七千八百六十億円、六千六百九十七億円）

第一、勧銀の合併新銀行は、預金量が三兆三千百八十一億円、貸出しが三兆二百二十九億円となり、断トツの首位に躍り出るわけだ。

井上が横田の電話に戻った。

「佐々木総裁にえらく褒められて気をよくしてたんですが、まさか日経がここまで強硬だとは思いませんでしたよ」

「もちろん澄田次官は福田大臣の耳に入れてるでしょう。その点は心配ないですよ。あしたの朝までに、まだ話してない行内関係者には電話で連絡するようにしますかねえ。こうなったら、あした発表せざるを得んでしょう」

「それが、さっき暦を見たら、十一日は仏滅なんですよ。一日ずらしてくれれば、大安なんですけどねえ」

横田は、井上の生まじめな口調に微笑を誘われながらも、少しぶっきらぼうに返した。

「わたしは、あんまり気になりませんけどねえ。どっちみち、日経を押えるのは難しいんじゃないですか」

2

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com